

アラートス研究

—教訓叙事詩に見る自然科学と倫理思想—

徳永ひとみ

序論

本研究では、ギリシアの詩人アラートスによる叙事詩『パイノメナ』を、主な分析の対象とする。

アラートス（前 315 頃-240 頃）はギリシアのソロイに生まれた。文法家のメネクラテスや、哲学者のティーモーンとメネデーモスらに師事していたと言われている。メネクラテスについての詳細は不明だが、ヘシオドス流の詩人で、農耕詩や天文学に関する詩を作っていたとされる。アラートスが彼の弟子だったのは、エフェソスにおいて、かつ早い時期であったと推測される。懐疑派の哲学者・諷刺詩人であったティーモーン（前 320 頃-230 頃）とアラートスとの交流がなされたのは、前 276 年頃、彼がマケドニアの宮廷を訪れたときであった。エレトリア学派の祖メネデーモス（前 339 頃-265 頃）とは、アラートスがアテネで学んでいたときに交流があったとされる。アラートスがアテネへ行ったのは、おそらく前 291 年頃である。そこで、コスのフィリタース（前 340 頃-285 頃、ヘレニズム詩の先駆けとなった詩人）やカリマコス（前 310/305 頃-240 頃）と知り合ったとされるが、彼らとの交流に関する明確な証拠は残っていない。その後、アラートスはストア派哲学の祖ゼノン（前 355 頃-263 頃）に師事する。ゼノンは以前よりマケドニアの王アンティゴノス・ゴナタスと親交があった。アラートスはアンティゴノスに招かれ、前 276 年頃、学生仲間であったストア派哲学者のペルサイオス（前 306 頃-243 頃）らとともに、マケドニアの宮廷に出仕する。同時期には、アイトーリアーのアレクサンドロス（前 315 頃-250 頃の詩人・文献学者で、前 285-283 頃アレクサンドリアの図書館で悲劇とサテュロス劇の整理・校訂を行った）が宮廷に滞在していたと言われる。アラートスはそこで文学サークルのメンバーとな

り、王のケルト人に対する勝利（前 277 年）やシリア王セレウコス 1 世の娘との結婚を祝う頌詩などを作った。前 276 年頃に、この地で『パイノメナ』が作られたとされる。前 274 年頃からは、セレウコス朝シリアの王アンティオコスの宮廷に出仕し、『オデュッセイア』の校訂本を完成させた。その後は再びマケドニアへ戻り、王都ペラで没したと言われる。

アラートスの現存する唯一の作品が、1154 行からなる叙事詩『パイノメナ』である。この詩は、北半球で見られる 43 個の星座の位置や形状、出没などの組織的な記述としては現存最古のものである。序歌(1-18)にはじまり、諸星座とその見分け方(19-461)、天球上の円（北回帰線・南回帰線・赤道・黄道）および黄道 12 星座に付随する星座（462-757）を解説した後、気象上のさまざまな前兆となる自然現象の記述(758-1141)に移り、最後に全体の結論(1142-1154)が述べられる¹。星座に関する詳細な記述については、紀元前 4 世紀の数学者・天文学者であったエウドクソスによる同名の散文作品を基にして、これを叙事詩化したとされる。エウドクソスの原著は現存していないが、星座の記述にバビロニアのデータを利用し、ギリシア語の資料において初めて黄道 12 星座の名前を記したものであったとされている²。作品後半の気象現象に関する部分は、アリストテレスの弟子であった哲学者・科学者テオプラストスの『雨と風と嵐と晴天の予兆について』に多く依拠していると考えられているが、この作品も現存していない。古代末期に至るまで広く愛読された『パイノメナ』は、その天文学上の誤りを批判した紀元前 2 世紀の天文学者ヒッパルコスを含め、現在名前が確認されるだけで 27 名の注釈者がいる。ローマ人にも好まれ、キケロやゲルマニクスらによってラテン語に翻訳された³。新約聖書の使徒行伝(17.28)にも、作品の一節が引用されている。

『パイノメナ』が作られて間もなく、アレクサンドリアにはアラートス自身が記したテキストに由来する写しが存在し、そのうちの少なくとも 1 つは後世のために大図

¹ 括弧内の数字は、作品中の行数を指す。本稿の他の箇所においても、同様に記載する。

² バートン 2004 (37 頁) および矢野 2004 (38 頁) を参照。

³ アラートスの略歴や『パイノメナ』に関する以上の記述は、松原 2010、松本・岡・中務 1991 (247-249 頁)、Kidd 1997 (pp.3-5)、Mair 1955 (pp.186-189)、Poochigian 2010 (pp.□-□) を参照。

書館に保存されていたと考えられる⁴。しかし、紀元前2世紀に至るまでに何人かの注釈者が校訂を行い、そのうちのいくつかはヒッパルコスが訂正を加えている。アラートスに対するヒッパルコスの批評は、後のテキストの伝承に影響し、後代の注釈における異読の原因になっていると考えられる。その後、紀元前1世紀末の文法家であるアレクサンドリアのテオンによって、古代における基となり最終的には中世の写本伝承の基礎をなすテキストが編集された。8世紀のフランスでは、『パイノメナ』のラテン語版（通称 *Aratus Latinus*）が作られている。現在『パイノメナ』には50の写本が知られており、*Marcianus 476*（ヴェニス、11世紀末-12世紀初頭）と *Vaticanus 1307*（ヴァチカン、11世紀末-12世紀初頭）が最も古いものである。なお、本稿で必要箇所として参照した部分には、異読として特筆すべき箇所はないと判断し、基本的に *Kidd* の校訂によるテキストに従った⁵。

本研究では、作品中に乙女座の解説として記された、正義の女神ディケーのエピソード（96-136、この箇所を以下「ディケー譚」とする）を中心に分析する。以下に、ディケー譚の拙訳を記す。なお、底本は主に *Kidd 1997* を参照した他、*Mair 1955*、*伊藤 2007* の訳註を適宜参照した⁶。

牛飼いの両足の下には乙女が見え、
彼女は手に輝く麦の穂を持っている。
太古の星の父であるというアストライオスの娘にせよ、
他のどなたかの娘にせよ、
彼女が穏やかに行かれますように。しかし人間たちには他の言い伝えがある、
かつて彼女は確かに地上にいたと。
彼女は人間たちの間を行き来して暮らし、男であれ

⁴ 『パイノメナ』の伝承と写本に関する以下の記述は、*Kidd 1997* (pp.49-68) および *Mair 1955* (pp.190-191) を参照。

⁵ 本稿で底本とした *Kidd 1997* は、主に *Marcianus 476*、*Scorialensis Σ□3*（エスコリアル、15世紀後半）、*Nat. Library of Scotland, Adv. MS 18.7.15*（エディンバラ、13世紀末）を使用している他、*Vaticanus 1307* を含む11の写本を異読として適宜参照している。

⁶ 本稿におけるアラートス『パイノメナ』からの引用は、同様の拙訳である。

女であれ古い時代の種族を拒絶などせず、
入り交じって座していた。不死であるにもかかわらず。
人々は彼女をディケーと呼んだ。彼女は老人たちを
広場や広い道に集め、
人々のための裁きを説いていた。
そのとき人々はまだ痛ましい争いも
喧嘩早い対立も戦いの騒音も知らず、
そのように暮らしていた。苦難の海は遠く、
船が遠くから暮らしをもたらすことはまだなく、
牛と犁とディケー自身が、人々を統べ、
正しいものを授けるディケーが、あらゆるものを与えていた。
その間彼女は地上にいた。大地がまだ黄金族を養っていたとき。
しかし銀の時代に、彼女は人との関わりが少なくなり、もはや進んで交わろうと
せず、
古い時代の人々を恋しがっていた。
それでもまだ銀の種族とは付き合っていた。
夕暮れ時にざわめく山から一人でやって来た。
誰とも親しく交わらず、
広い丘を人々で満たしたとき、
脅して悪行を責め、
彼らが呼んでももはや姿を見せることはないだろうと言った。
「黄金族の父親たちは、劣等な種族を残したものだ。
しかしおまえたちはさらに邪悪な子を生むだろう。
さらに争いが、そして無慈悲な流血が
人間たちに起こり、悪しき苦痛が課せられるだろう」
そう言って山を目指した。
なおも彼女を見つめるすべての人々を残して。
しかしこの人々が死ぬと、
青銅の種族が生まれた。先代より攻撃的な人々は、
追いはぎが持ち悪行をなす刃物を初めて鑄造し、

犁を引く牛を初めて食べた。
ディケーは人間のこの種族を嫌い
天空へ飛び去った。そしてその場所に住まわれた。
そこはまさに夜には今もなお人間たちに乙女が姿を見せ、
人目を引く牛飼いに近いところである。

乙女座の“乙女”は元来、穀物や豊穡を司る女神デメテルやその娘ペルセポネに帰せられていたが、ディケー譚以降、乙女が正義の女神であるという神話が定着した。このことは、『パイノメナ』ではハサミ座(さそり座の一部)として記されていた星座が、後に正義を測る天秤座として認識されるに至った一因であると考えられ、ディケー譚は『パイノメナ』の中でも特に印象深く、世間に広く認知されていた部分であると言える。また、『パイノメナ』は星座や気象現象の組織的な記述に力を注ぐ分、全体として物語的な志向に乏しいという特徴を有する中で、乙女座の説明としてその縁起譚と言えるような女神ディケーの神話が付与されていることは例外的である。『パイノメナ』を考察するにあたり、これらの特異性を持つディケー譚は、検証に値すると考える。

『パイノメナ』は全体として、紀元前8世紀の詩人ヘシオドスによる叙事詩『仕事と日々』をモデルに作られており、「教訓叙事詩」のジャンルに属する。例えば、序歌・主題の展開・結論という構成や、彼らが生きた時代の生活・暮らしに関する問題をテーマとした内容において、『仕事と日々』に依拠している⁷。『パイノメナ』と『仕事と日々』とのつながりが明白にわかる箇所の一つが、ディケー譚である。ディケー譚は、

⁷ Kidd 1997, pp.8

『仕事と日々』中の五時代説話⁸ (109-201) と、正義論⁹ (213-285) をもとに、アラートスが創作したものである。『仕事と日々』とディケー譚の相違点としては、ヘシオドスが黄金時代から銀、青銅、英雄の時代を経て鉄の時代までの五時代を語るのに対し、アラートスのディケー譚で描かれるのは黄金、銀、青銅の三時代であることが挙げられる。また、『仕事と日々』において最後に地上を去るのはアイドス（廉恥）とネメシス（義憤）の二女神であり、正義の女神ディケーが登場するのは、五時代神話とは別の正義論の部分である。ディケー譚におけるヘシオドスの影響を論じた研究では、ソルムセンがディケー譚と『仕事と日々』で使用されている語彙やフレーズを比較分析し、ディケー譚に記された黄金時代 (100-114) には『仕事と日々』における「正義の都市」のモチーフが反映されていると主張している (Solmsen 1996)。ディケー譚に関する他の先行研究も、全体として『仕事と日々』を参照しながら、『パイノメナ』という作品の中でディケー譚が意味することの解明を試みている。ヘシオドスに加え、同じく教訓叙事詩として捉えられる作品を残した哲学者エンペドクレスの影響を指摘する研究もなされている。作品における時間の概念の捉え方等の性質にヘシオドスとエンペドクレスの思想を見る研究 (Gee 2013) や、女性の役割という観点から女神ディケーの発言に着目してヘシオドスやエンペドクレスとの相違を検証する研究 (Faulkner 2015) などが挙げられる。

『パイノメナ』の汎神論的な世界観や宇宙論については、同時代の初期ストア派哲学の影響が指摘されている。その影響は特に、冒頭の序歌 (1-18) において顕著に現れ、アラートスと同時代のストア派哲学者クレアンテスの『ゼウス讃歌』に見られる

⁸ 人間の種族を金属に例えて、その段階的な墮落を語る。まず、神々によって黄金の種族が作られた。労苦や老いを知らない彼らは、ひとりでの稔りをもたらず大地で穏やかに暮らし、死後は善い精霊となって地上を見守った。2番目に作られた銀の種族は先代よりはるかに劣り、100年間母親のもとで子どものまま育つ。敬神を怠った彼らは、神々により被い隠された。3番目に作られたのは、恐ろしく力の強い青銅の種族であり、互いに闘って身を滅ぼした。4番目の英雄の種族も戦争によって身を滅ぼすが、死後は幸福者の島々と呼ばれる場所で暮らした。ヘシオドスが生きるのは、最も悲惨な鉄の種族の時代である。彼はこの時代の人間の労苦や不道徳を嘆き、アイドス（廉恥）とネメシス（義憤）の女神たちが苦悩を残して地上を去ると予言する。

⁹ 第2章第1-2節において詳述する。

ようなストア的宇宙観が反映されている。ストア派におけるゼウスは、すべてを最良の状態に導く理性的な摂理として人間に恩恵を施し、その力は全宇宙に行き渡るものとされる¹⁰。アラートスは、序歌以外のいくつかの箇所においても、ゼウスについて言及している。伊藤はアラートスが星座や自然現象をゼウスの「セーマ（しるし）」として記述していることに注目し、ゼウスと人間、星空と人間との関わりが作品のテーマであると主張する（伊藤 1985）。同研究で伊藤は、ディケー譚が過去から現在に至るゼウスのセーマと人間との結びつきを語り、作品の性質を強調するエピソードであると述べている。『パイノメナ』におけるセーマに着目した研究には、『パイノメナ』およびディケー譚が、神と人間とのコミュニケーション手段が会話から記述（セーマ）へと変化したことを示すものであると主張する研究がある（Volk 2012）。

既存の研究では、『パイノメナ』やディケー譚におけるヘシオドスやストア派哲学などの影響を、個別的な視点で論じているものが多いように思われる。本研究では、『パイノメナ』が教訓叙事詩のジャンルに位置していることに注目する。教訓叙事詩という観点を主軸に据え、古代ギリシアにおける倫理思想史や自然科学の発展の歴史という視点を織り交ぜながら、『パイノメナ』の持つ性質や作者の意図について考察する。研究の方法としては、『パイノメナ』を中心に原典や注釈書を参照する他、古代ギリシアの文学、倫理学、自然科学等の関連テキストを検証する。ヘレニズム時代までの詩人および哲学者たちの思想や、当時の社会的・文化的な状況を踏まえ、『パイノメナ』が過去の教訓叙事詩の流れに沿うために備えている性質や、ヘレニズム時代の新しい教訓叙事詩として有している性格を解明することを、本研究の目的とする。

¹⁰ Kidd 1997, pp.10

第1章 ヘレニズムの教訓叙事詩

第1節 教訓叙事詩の伝統

『パイノメナ』はギリシアの文学史の中で、「教訓叙事詩」として位置づけられている。古代ギリシアにおける叙事詩作品として、ホメロスの『イリアス』および『オデュッセイア』や、アラートスとほぼ同時代の詩人であるアポロニオス・ロディオスの『アルゴナウティカ』のような「英雄叙事詩」がある。しかし、叙事詩の果たす役割は英雄たちの伝説を語ることに留まらない。教訓叙事詩のジャンルに含まれる作品は、科学や哲学、狩猟、農耕など、その内容は多岐に渡っている。それらに共通しているのは、ある特定の事柄を読者に教示することを目的とし、主にヘクサメトロス（六脚韻）の形式で作られていることである。その伝統は、紀元前8世紀の詩人ヘシオドスに始まる。

ヘシオドスの真作とされ、ほぼ完全な形で現存しているのは、『神統記』と『仕事と日々』の2作品である。神々の系譜を語る『神統記』は、ゼウスと詩の女神ムーサたちについて述べ、彼らに祈願する序歌にはじまる。ムーサたちはヘシオドスに、次のように語りかける。

「野山に暮らす羊飼いたちよ 卑しく哀れなものたちよ 喰いの腹しかもたぬ者らよ

私たちは たくさんの真実に似た虚偽を話すことができます

けれども 私たちは その気になれば 真実を宣べることもできるのです¹¹」(26-28)

英雄たちの神話伝説を物語る叙事詩とは異なり、ヘシオドスの叙事詩には、自らの主張を真実として語ろうとする詩人の意思が表れている。『仕事と日々』もまた、英雄叙事詩とは性質を異にしており、序歌に続いて神話や寓話、箴言等を織り交ぜながら人の守るべき正義と勤労を説いた後、具体的な農事暦や航海に関すること、人生訓、日の吉凶について述べる。『神統記』と『仕事と日々』両作品の基盤となっている神々の

¹¹ 廣川洋一訳『ヘシオドス 神統記』（1984年、岩波書店）から引用。

系譜や生活の知恵は、当時のギリシアで既に一般化されていたものであると考えられる。ヘシオドスはそれらの上に、ディケーをはじめとした抽象的な概念の神格化や、正義・労働の勧めといった自らの主張を融合させて表現している。

紀元前6世紀から5世紀の哲学者であるクセノファネス、パルメニデス、エンペドクレスは、自らの主張をヘクサメトロスの叙事詩として表した。それぞれの作品は、それまでの詩人や哲学者たちの思想的な影響を受けているものの、自然科学的な部分と倫理的・道徳的な部分の両方を合わせ持った各々の新たな思想について、強く主張している。哲学の表現手段としてヘクサメトロスを用いたのはエンペドクレスが最後であり、以後は散文による記述が主流となっていった。

散文が未だ発達していなかった時代に、言葉を正確かつ客観的に語り、威厳を持って表現する手段がヘクサメトロスであった¹²。しかし、紀元前4世紀に至るまでに、教訓的な内容を伝える手段は韻文よりも散文に求められるようになっていた。文学史に再び教訓叙事詩が登場するのは、紀元前3世紀頃からはじまるヘレニズム時代である。この時代に、優雅であることに加えて詩人でもありたいという思考によって、無造作に物を書き流す風潮が盛んになると同時に、散文を含むあらゆる素材が韻文化されるようになった¹³。そのような時代における教訓叙事詩は、かつて韻文が担っていた教示の役割を散文から取り戻すという目的を持つだけでなく、古いジャンルを新たに組み立て直すにあたり、ヘシオドスに回帰するとともにホメロスの技法を利用している¹⁴。また、ヘシオドスや詩人哲学者たちが全体として道徳や哲学に関わる倫理的な教訓を説いたのに対し、ヘレニズム時代の教訓叙事詩は、専門的な事柄を好んで扱いつつ詩的な技巧を示すようになった¹⁵。このような特徴は、アラートスやニカンドロスの作品に見ることができる。ニカンドロスは紀元前2世紀中頃かそれ以降の人物とされ、アラートスと同じように散文の作品を叙事詩化した『テーリアカ』と『アレクシパルマカ』を残している。前者は958行に渡り、蛇をはじめとする有毒生物とそれらの毒

¹² 逸身 2000、146頁

¹³ ブルクハルト 1992、185頁

¹⁴ 伊藤 2007、486頁

¹⁵ Hornblower, Spawforth and Eidinow 2012, pp.448-449, n. didactic poetry

に対して有効な治療法を説明し、630 行で構成される後者には、植物・鉱物・動物の毒と解毒剤が挙げられている。これら 2 つの詩は、専門的な知識の羅列という印象が『パイノメナ』よりもさらに強く、作品中に作者自身の主張や思想の表れはほとんど見られない。

「教訓叙事詩」という 1 つの枠組みであっても、そのジャンルに含まれるとされる詩が教示する題材はさまざまであり、その性質は時代とともに移り変わってきた。特に、それぞれの詩が表現している既存の知識と新たな主張とのバランスについては、大きな違いがあると考えられる。ヘシオドスは古代ギリシアにおいて一般化されていた知識を詩によって表したが、そこには後代にも影響を与える正義や労働に関する作者の主張が織り交ぜられていた。その後の詩人哲学者たちによる詩は、ヘシオドスの伝統を受け継ぎながら、自然科学的・哲学的な自らの主張を語るためにヘクサメトロスを利用した。そして、ヘレニズム時代に復活した新たな教訓叙事詩は、散文作品に見られるような物珍しい事柄を韻文化することに力点を置き、より専門的で実用的な知識を重視するようになる。『パイノメナ』が教示する内容は、主に当時の科学者たちによる天文学や気象学の知識であり、かつての教訓叙事詩に比べてアラトス自身の主張に乏しい。その背景の 1 つとして考えられるのは、「詩は誰に向けて作られるのか」ということに関する意識の変化である。ヘレニズム時代における詩は、民衆全体に向けられたものではなく、限られた知識人を真の対象とするものであった。

第 2 節 ヘレニズム時代と詩

ギリシアの古典期（前 5-4 世紀）と、ローマ帝政時代を含むヘレニズム期では、文学や詩の社会的な位置づけが大きく変化している¹⁶。民衆と支配階級との間隔が広がり、詩はかつてのアテナイにおけるように市民全体が理解し得るものではなく、深い学者的な教養を前提とするものへと変わっていった¹⁷。その背景には、アレクサンドリアにおけるムセイオンの設立と、それに伴う文献学の勃興が深く関係していると考え

¹⁶ 内 1978、165 頁

¹⁷ 高津 1977、210 頁

る。

アレクサンドロス大王がもたらしたコスモポリタニズムや文化融合の風潮を引き継ぎ、ヘレニズム世界の中心地の1つとなったのが、プトレマイオス朝エジプトの首都アレクサンドリアであった。初代王プトレマイオス1世（前305-285在位）は、学芸の興隆を国家戦略の1つとして掲げ、プラトンのアカデメイアやアリストテレスのリュケイオンに倣い、ムセイオンと名付けられた大規模な研究機関を創設した。その後プトレマイオス2世が助長して完成させたとされるムセイオンは、主に文学・天文学・数学・医学の4部門の研究を行い、教室や大食堂、教員宿舎、実験室、植物園、天文台、図書館などを付設していた。図書館は筆耕用の書記を雇い、古書の筆写を行うことで蔵書数を増加させ、書物の収集にも尽力した。図書館が作られて数十年経った頃には、すでに40～50万巻が所蔵されていたとも言われる。この図書館に集められた膨大な書籍が、ヘレニズム時代における文献学や文法学、古文書学といった学問分野の発達を可能にした。そもそも、口頭伝承が文字伝承へと移行し始めたのは、紀元前6世紀頃であったと推測される¹⁸。書物の流通が飛躍的に発達したのは、アテナイでも紀元前5世紀末期からであった¹⁹。アレクサンドリアの学者たちは、ホメロスをはじめとし、抒情詩、合唱詩、悲劇、喜劇等の韻文作品に加え、散文作品についても諸本（パピルスの巻物）をギリシア各地から収集し、分類し、校訂している。彼らの活動によって、紀元前4世紀までの多くの著作のテキストが確立され、問題点を論じてさまざまな解釈を提示する注釈書が生まれた²⁰。

ヘレニズム期のアラートスとほぼ同時代の詩人に、カリマコスがいる。アラートスとカリマコスは、両者とも教養と学識ある説明を好む傾向にあり、アラートスはカリマコスの詩的な影響を受けていると考えられている。カリマコスは、紀元前3世紀よりも少し前に、リビア沿岸のギリシア植民市キュレネに生まれた。彼はアレクサンド

¹⁸ 久保 1992、4-5 頁

¹⁹ 逸身 2000、33 頁

²⁰ アレクサンドリアや学者たちの活動に関する以上の記述は、逸身・川崎・高橋 1991 (12-13 頁)、酒井 1989 (71 頁)、坂本 2013 (39 頁)、シューテリヒ 1975 (203-204 頁)、レイノルズ・ウィルソン 1996 (23 頁) を参照。

リアの図書館において、叙事詩・抒情詩・劇・弁論などをジャンル別に分類整理し、各作家の短い伝記を付けるという作業を行い、『図書目録』120巻を完成させたと言われている。これらの仕事を通して得られたギリシアの文学や文化についての膨大な知識が、彼を「学者詩人」として大成させることとなった。前述の通り、ヘレニズム期の詩は知識人や教養ある人々、文学者たちのものという側面が強く、かつてのようにすべての民衆に向けられたものではない。そのような風潮を世に広めた1人がカリマコスであった。彼は、ホメロスを模倣した擬古典主義的な詩を批判し、詩の変革を実現するために、目新しい題材を選んだり、短い詩の中に高度な詩的技巧を用いたりしている。そのような姿勢で作られた彼の詩は、万人に理解してもらうことを意図していない。彼が目を向けていたのは、教養ある人々が集まる小サークルであり、彼と同じ美的信念を持つ者たちであった²¹。このようなカリマコスの詩論に影響を受けつつ、詩の新分野を開拓したのがアラトスであった。アラトスは詩人でもあり、『オデュッセイア』のテキスト研究を行った古典学者でもある。彼とカリマコスとの間にどのような交流があったのかについて、詳細を知るための資料は残っていない。しかし、カリマコスはアラトスの『パイノメナ』に対するエピグラムを作っており、両者に何らかの交流があったことが推測される。

『パイノメナ』は、ヘレニズム時代における詩の変革の中で、当時の知識階級を読者として想定していた。その一方で、『パイノメナ』が教訓叙事詩としてヘシオドス以来の流れの中にある以上、一般民衆への教示も意識していたはずであると考えられる。『パイノメナ』には、同時代の詩人たちの作品に見られる学術的な難解語や稀語がほとんど使用されておらず、作品の平明な文体は人々が記憶にとどめるのにふさわしい形である²²。ヘレニズム時代に教訓叙事詩として作られた『パイノメナ』は、知識人たちの詩的な理解を望みつつ、庶民に教え諭すという役割を担おうとしている。

ヘシオドスや古代の詩人哲学者たちは、各々が伝えたい意見や思想を持っており、それらを語る手段として叙事詩を選んだ。そのようにして生まれた作品が人々に「英

²¹ カリマコスと彼の作品に関する以上の記述は、伊藤 2007 (485頁)、スネル 1974 (233頁)、松本・岡・中務 1991 (225-226頁)、ロミィ 1998 (337頁) を参照。

²² 伊藤 2007 (488頁) および松本・岡・中務 1991 (249頁) を参照。

雄叙事詩」とは異なる「教訓叙事詩」として認識されるようになり、以降の文学史における教訓叙事詩のジャンルや伝統が形成された。しかし、ヘレニズムにおいては、かつての詩人たちと創作の姿勢が異なる。アラートスの創作の動機は、自身の意見や思想を伝えることではなく、詩を作ることそれ自体にある。『パイノメナ』に作者の主張が少ないことには、アラートスのこのような姿勢も影響していると考えられる。彼の目的は、教訓叙事詩を作ること、自身の作品を教訓叙事詩として仕上げることである。そして、『パイノメナ』が過去の教訓叙事詩をモデルとし、伝統の流れに沿う教訓叙事詩として振る舞うために必要としたのが、ヘシオドスや詩人哲学者たちの詩に見られた倫理的な要素、すなわち人間の道徳に関わるような教訓であると考えられる。『パイノメナ』において、この性質を顕著に有しているのがディケー譚である。ディケー譚の原型はヘシオドスの『仕事と日々』にあるものの、アラートスによって意図的な改変が加えられている。星座になった乙女が象徴しているのは、ヘシオドス以来の歴史を有する正義（ディケー）であり、正義は古代ギリシアの倫理思想史を代表する概念である。倫理的性質の付与という働きを持つディケー譚を、作品全体の性格に影響を与える部分と位置づけ、次章の考察へ移る。

第2章 『パイノメナ』に見る倫理思想

第1節 正義の概念

アラートスが乙女座と結びつけた女神「ディケー（Δίκη）」は、「正義」を意味している。次節におけるディケー譚の具体的な分析の前に、本節では、古代ギリシアにおいて正義という概念がどのように捉えられてきたのかを考察する。

古代ギリシアの倫理思想史において、正義の概念は主要な考察対象の1つであり続けた。その礎を築き人々に正義を説いたのが、詩人ヘシオドスであった。ヘシオドスより数十年遡るとされるホメロスの英雄叙事詩においては、人間が備えるべき徳の中に正義は含まれていなかった。詩に登場するオリュンポスの神々は、祭儀や捧げ物の有無、さらに言うと自分の好き嫌いによって人間への態度を変えるため、英雄たちは

神々の機嫌を損ねて災厄を招かないように気を配ることはあっても、行為自体の正・不正を気にする必要がなかったのである²³。しかし、教訓叙事詩と評されるヘシオドスの『仕事と日々』において、正義は人間や社会に必要不可欠な徳としての地位を獲得することとなる。

『仕事と日々』の構成は、正義論（1-382）、農事暦（383-617）、航海について（618-694）、人生訓（695-764）、日の吉凶（765-828）と区分できる²⁴。この構成に従うと、詩全体の半分近くが正義論に当てられていることとなり、正義がこの作品の中心的な主題であることがうかがえる。ヘシオドスは詩の冒頭で、ゼウスに正義を祈願する²⁵。

簡単に強さを与え、簡単に強き者を押しつぶし、
簡単に高貴な者を卑しくし、簡単に卑しい者を高め、
簡単に曲がった者を正し、高慢な者を破滅させる、
天上の館に住まい、雷鳴らすゼウスは。

ご覧になりお聞きになって、耳を傾けたまえ、そして正義によって裁きを正したまえ。

(5-9)

ここにおいてゼウスは、正義を侵す者やその国に罰を与えるという役割を担っている。ヘシオドスが語るゼウスは正義の番人であり、ホメロスにおけるオリュンポスの神々とは性質を異にする。『仕事と日々』は、ゼウスの他にも誓いの神ホルコスや女神ディケーをはじめ、さまざまな神々によって人間の裁きの正・不正が見張られていると説く。しかし、人が守るべき正義は、人の手によって虐げられる。アラートス『パイノメナ』におけるディケー譚の原型であり、人間の種族が黄金から白銀、青銅、英雄、鉄へと墮落していく五時代の説話（106-201）では、鉄の時代における正義の侵害が予告されている。

²³ 訓覇・有福 1989、16 頁

²⁴ 松本・岡・中務 1991（40 頁）および松平 1986 を参照。

²⁵ 本稿におけるヘシオドス『仕事と日々』からの引用は拙訳であり、底本は主に West 1978 を参照した他、Evelyn-White 1914、松平 1986 の訳註を適宜参照した。

彼らは年老いた両親に養育の恩を返さないだろう。
力こそ正義と考える者たちで、互いにその国を侵すだろう。
誓いを守る者、正しい者、善い者への親愛はなくなり、
むしろ悪事をはたらく者や暴力をふるう者を重んずるだろう。(187-193)

ヘシオドスはこのような鉄の時代の不道徳を語り、アイドス（廉恥）とネメシス（義憤）の二女神が人間たちに苦悩を残して地上を去ることを予言して、五時代説話を終える。この後に続くのが、暴力を非難する正義論である。彼の考える正義は、暴力によって傷つけられることがあっても、最終的には暴力に優る力を持っている。そして、正しい裁きを下し、正義を守る者たちの国は繁栄する。ヘシオドスは、自身との訴訟において不正を犯した弟のペルセースと、国を治める権力者たちに対してこのような正義の勧めを説き、次のように締めくくる。

ペルセースよ、これらのことを胸にしまい、
正義に耳を傾け、暴力は一切忘れなさい。
クロノスの御子は人間にこの掟を定めたからだ、
魚や獣や空飛ぶ鳥は
互いに食らい合う、それらには正義がないから。
人間には彼が正義を与えた、それは最も善いものだ。
正しいことを知っており、それを進んで語る者には、
遥かを見渡すゼウスがその者に幸を与える。
証人として偽りを誓い、故意に偽証をし、
そうして正義を傷つけ、救いがたい罪を犯すと、
その者の一族は後に落ちぶれる。
誓いを守る男の一族は後に栄える。(274-285)

ヘシオドスは、人間の行為を正義の尺度で測った最初の人であると言われる²⁶。彼にと

²⁶ スネル 1974、95 頁

っての正義は、暴力 (ὑβρις) に相對し、人間だけが所有するものとして最上の価値を持つ。しかし、その正義は神 (ゼウス) によって授けられたものであり、神々の支配を受けている。『神統記』において、ゼウスが宇宙自然の秩序の具現者であることを示したヘシオドスは、『仕事と日々』において、人間生活の秩序原理もまたゼウスに由来することを示した²⁷。彼の考える人間の正義は、人間の世界の中で完結するものではなく、不正を監視し罰する神々の存在を必要としていた。

ヘシオドスの時代からギリシア人が思索を続けてきた正義の問いに対し、紀元前 5 世紀のアテナイ市民として答えを出そうとしたのが、悲劇詩人アイスキュロスであった²⁸。アトレウス王家の神話を題材にした『オレスティア』3 部作では、罪や復讐の連鎖を終わらせるものとして、「正義の変容」が表されている²⁹。第 1 部『アガ멤ノン』ではトロイア戦争から帰国したアガ멤ノン王に対する王妃クリュタイメストラの謀殺、第 2 部『コエーポロイ』では夫殺しの王妃に対する王子オレステスの仇討、第 3 部『エウメニデス』ではエリニュエス (復讐の女神) たちによるオレステスの母殺しへの追求が描かれる。アガ멤ノンが自分の娘を人身御供としたことに端を発する一連の報復行為は、各々自分の行いが正義に基づくものであると主張して行われたものであり、正義と正義との争いが繰り返される。

いざ、おお偉大なる運命の女神たちよ、ゼウスのもとより現れて、
いまこそ終わりをもたらしたまえ、
正義のさだめが向きをあらため、歩みをすすめるその道なりに。
憎悪の言葉にたいしては、憎悪の
言葉の報いをあたえよ！正義の女神は、負い目を返せの
旗にかかげて、雄叫びたかく戦を告げている、
血の一撃にたいしては、血の
一撃を報いるべし、と。ひとの身に害をなしたるものは、

²⁷ 廣川 1987、49 頁

²⁸ 松本・岡・中務 1991、111-112 頁

²⁹ 生松・木田・伊東・岩田 1977、32 頁

わが身にも害をうけるべしと、三代の昔に遡る話は告げている³⁰。

(『コエーポロイ』 306-315)

このような「目には目を」の原理を認める正義は、第3部の終わりに、女神アテナが設けた神々と市民たちによる裁判によって解決を迎える。そして、エリニュエス（復讐の女神）がエウメニデス（恵み深い女神）へと変わることにより、仕返しを正当化する正義ではなく、法秩序に基づく正義が確立される。ヘシオドスの考える正義にも“正しい裁き”という意味が含まれていたが、アイスキュロスにおいては適法の概念がより強く表れている。彼はこれら3作品を通じて、緩やかだが確かな神の導きに基づく、民主的な正義への変容を描いた³¹。

『仕事と日々』において、弟と国の支配者たちに対して正義を説いたヘシオドスは、正義を重んじる者とその国の繁栄を主張し、「個」と「全体」両方の正義を意識していた。個々人の正義がポリス全体のあり方に関わるという認識は、ヘシオドス以来の伝統を受け継いだプラトンの思想にも読み取ることができる³²。また、個人の善を社会の善と結びつけて考えたという点で、ソクラテスの精神を受け継いでいると言える³³。ソクラテスは個々の正しい行為に共通する普遍的な正しさを定義しようとしたが、プラトンはこの探求をさらに進め、個々の正しい行為とは別に、永遠で不滅の正義や模範としての正義の存在を考えた³⁴。プラトンの正義論が展開される対話篇『国家』では、正義を考察するにあたり、正義を持つものの中でより規模の大きなもの（国家）を先に取り上げて分析する。そうすることによって、一個人の正義の性格を見極めることが容易になるとし、国家社会と個人とを類比的に取り上げて論じている。統治者の知恵・戦士の勇気・万人の節制という国家の持つ三要素を、人間の魂の理知・気概・欲望という性質と対応させた上で、国家における正義は各人が他者の領域を侵害せず自らの職務を果たすこと、個人における正義は魂の各要素が他を侵害せず自らの役割を

³⁰ 久保正彰・橋本隆夫訳『ギリシア悲劇全集 1』（1990年、岩波書店）から引用。

³¹ 生松・木田・伊東・岩田 1977、32頁

³² 山川 1996、11頁

³³ 中野 1975、63頁

³⁴ 川島 1999、34頁

果たすことであると結論づける。プラトンの倫理思想の中心は、各々が自分の本分を全うするという意味を持つ正義の概念と、そのような正義を必要とする理想国家論であったと考える。

プラトンの倫理思想は、彼のイデア哲学と固く結びついており、それ自体で独立した哲学の部門を形成するものではなかった³⁵。現在「倫理学」と呼ばれている学問領域を確立し、倫理学書ないし倫理的な諸問題を「タ・エーティカ (τὰ ἠθικά)」と呼んだのは、アリストテレスが最初であった³⁶。アリストテレスの倫理学は、彼の考えた学問体系の3つの分類(理論学・実践学・制作技術)のうち、実践学に位置づけられている。実践学(πρακτικὴ ἐπιστήμη)という言葉の通り、彼の倫理学の対象や目的は、実際の行動に求められている。

われわれは正しいことをすることによって、正しいひとになり、節制あることをすることによって、節制あるひとになり、勇氣あることをすることによって勇氣あるひとになるのである³⁷。

(『ニコマコス倫理学』Ⅱ, 1, 1103b1-2)

彼は、「徳とは何か」「善とは何か」といった本質を追求することではなく、徳を持ち、善くなることを倫理学の目的としていた³⁸。アリストテレスの正義論は主に、彼の著作とされる『ニコマコス倫理学』第5巻に見ることができる。プラトンが正義を知恵・勇氣・節制と並んで特殊な徳の一つとしていたのに対し、アリストテレスは正義を特殊な徳から切り離し、全体的な徳として論究した³⁹。彼は「正しさ」を、法律にかなうことおよび平等であることと定義する。その上で、他者との関わりにおける徳に対する「全体」と「部分」の関係によって、正義を区別する。広義の正義とは適法であり、諸徳の中で最も優れ、徳の全体を指すものである。一方で、狭義の正義とは平等を意

³⁵ デアボラフ 1984、30 頁

³⁶ 宇都宮・熊野 1994、30 頁

³⁷ 加藤信朗訳『アリストテレス全集 13 ニコマコス倫理学』(1973 年、岩波書店) から引用。

³⁸ 大島 1973、39 頁

³⁹ 加藤 1973、399 頁

味し、徳の一部として存在する。彼はこの狭義の正義を、分配の正義（名誉や財など、ポリスにおける人々の間に分割されるものに関する正義）、規制の正義（人と人との関わりにおいてその関係を正しく規制する正義）、応報の正義（交換における人と人との結びつきを成立させるための正義）の3種類に区分した。さらに、平等な自由人の間に成立するポリス的正義についての言及を進める。ポリス的正義には、自然本性による正義と法律による正義の2種類があり、前者が人の意見に左右されずあらゆる場所で同じ力を持つのに対し、後者は人に定められることで強制力を持つ。正義をさまざまに区分したアリストテレスの正義論は、実際のポリスや、ポリスで生活する人間を中心として成立するものである。この点において、現実の正義の存在理由を正義のアイデアの存在に求めたプラトンとは異なっている。

アラトス『パイノメナ』への影響が指摘されるヘレニズム期の初期ストア派哲学⁴⁰は、論理学・自然学・倫理学の3分野から構成される。ストア派の正義についての論究は、倫理学の領域においてなされている。

正義は、この名で呼ばれるにふさわしいものであるなら、自然本性によるのであり、知者は、誰かに不正を働くことから無縁であるだけでなく、危害を加えることから無縁である。友人や支援者と、不正のために組んで共謀することも正しいことではない。とりわけ熱心〔かつ真剣〕に擁護されるのは、公平性を有益性から切り離すことはできず、すべて公平で正しいことは倫理的であり、反対に倫理的なことはすべて正しく公平である、という点である⁴¹。

（キケロ『善と悪の究極について』第3巻71）

アリストテレスは、ポリス的正義を自然本性によるものと法律によるものとの間に区別したが、ストア派における正義は、自然本性的な性質を持つ。その上で、ストア派は正義の起源を法に求めている。彼らの考える法とは、「自然本性の力であり、思慮あるひ

⁴⁰ 初期ストア派哲学を形成した哲学者として、ゼノン（前355頃-263頃）、クレアンテス（前331頃または304?-232頃）、クリュシッポス（前280頃-207頃）がいる。

⁴¹ 中川純男・山口義久訳『初期ストア派断片集4』（2005年、京都大学学術出版会）断片309から引用。

との精神ないし理性であり、正不正の基準⁴²」だからである。法は命令や禁止の際に働く正しい理性であり、法が与えられているのであれば、正義も同様に与えられていると言う。ここにおける法とは、人によって制定されたものではなく、「すべての時代を越えて、書かれた法のすべてより以前に、そもそも国家より以前に生まれたもの⁴³」としての、いわゆる自然法である。ストア派における正義は、宇宙全体を永続的に支配する自然法に、その根拠を求める。それはすなわち、正義が1つの国家や民族だけに意味を持つものではなく、すべての人々に課せられた法則であることを意味していた⁴⁴。さらに、正義は思慮・節制・勇気とともに第一義的な徳の1つとされ、これら4つの徳にはそれぞれ定義がある。正義は「配分されるべきことについての思慮⁴⁵」であり、正義のもとには、敬神(神に仕えることの知識)・親切(人によくしてやることの知識)・協調性(共同関係における平等性の知識)・付き合いのよさ(隣人との非難できないような付き合いの知識)といった諸徳が所属すると言う。このような性質から、ストア派の正義では共同体における人々の生活の中でその力をいかに働かせるかという点が意識され、人間関係論の中で正義論を捉えようとしていることがうかがえる。

正義の概念に関する考察は、ギリシアにおいて古代から連綿と続き、発展してきた。その発展の歴史は、正義の属する場所が次第に神々の下から人間自身の下へと変わっていく流れを示していると考えられる。正義を神格化しその必要性を説いたヘシオドスは、正義を人間特有の概念としながらも、正義による秩序の守り手としてのゼウスの権威を強調した。アイスキュロスの悲劇では、正義の基盤が法秩序の下に位置づけられ、人々を正義へ導く神の姿が描かれた。その後の時代の変化とともに、人間の道徳的な問題への反省は、それまで詩や箴言などの形で行われていたものが、理論的かつ体系的に行われるようになっていく⁴⁶。プラトンは国家社会と個人とを類比的に取り上げて正義について論じ、正義の実現を理想国家の条件として掲げた。アリストテレスは正義をさまざまに区別して定義づけ、ポリス社会における人間の正義について探求し

⁴² 前掲注 41、断片 315 から引用。

⁴³ 前掲注 41、断片 315 から引用。

⁴⁴ 中野 1975、59 頁

⁴⁵ 中川純男訳『初期ストア派断片集 1』(2000 年、京都大学学術出版会)断片 200 から引用。

⁴⁶ 島田 1985、20 頁

た。初期ストア派の正義には、プラトンの四元徳の思想が反映されていることに加え、「分配的正義」を設定して正義の平等性を示したアリストテレスの影響もうかがえる。自然法に基づくストア派の正義は、ヘレニズムの世界市民思想と相まって、万人に当てはまる規範として宣言された。ヘシオドスやアイスキュロスの世界において神の作用を必要としていた正義は、哲学者たちの論究を経て、その働きを人間同士の関わりのうちに見出すこととなった。正義の力が神々のものから人間のものへと変容するプロセスは、『パイノメナ』におけるディケー譚にも表れていると考える。

第2節 女神ディケー

アラトスは、乙女座の縁起譚として正義の女神（ディケー）の神話を創作することによって、『パイノメナ』の中に正義というヘシオドス風かつ倫理的な要素を取り込んだ。そもそも「ディケー（δικη）」という言葉は、英雄叙事詩では慣習的に、王の裁き・正当な言い分・定めといった意味で用いられている⁴⁷。ヘシオドスはこれらに加え、擬人的な使い方で女神を表し、自らの主張する新たな力を表す言葉にしようとした⁴⁸。彼は『神統記』（901-902）において、ディケーをゼウスと掟の女神テミスの娘とし、秩序（エウノミー）と平和（エイレーネー）の姉妹で季節の女神たち（ホーライ）の1人としている。『仕事と日々』において女神ディケーが登場するのは、正義論の中の以下の箇所である。

ホルコス（誓いの神）は直ちに曲がった裁きについて行くし、
賄賂をむさぼり、曲がった正義で裁きを下す男たちが連れて行くままに
ディケーが引きずられて行くとき、騒音が起こる。
女神は泣きながら町や人々の住むところへついて行き、

⁴⁷ 久保 1973、188 頁

⁴⁸ 久保 1973、188 頁

霧をまとい、災いをもたらす。

わが身を追い出し、わが身をまっすぐに扱わない者どもに。(219-224)

そして乙女ディケーがいらっしゃる、ゼウスの娘で、

オリュンポスの神々が敬う高貴な女神だ。

曲がった中傷で女神を傷つける者がいれば、

女神は直ちにクロノスの御子、父神ゼウスのそばに座り、

人間の邪な心を訴える、

そして悪意を抱き、裁きをねじ曲げ、曲がった判決を下す

領主の愚行を民が償うことになる。(256-262)

ヘシオドスの語るディケーは、人間の不正に対し行動を起こす一方で、人間に軽視されたり侵害されたりしてゼウスに泣きつくという弱い一面を持っている。正義を曲げる者たちに対してディケー自身も災いをもたらすと言うが、彼らへの罰はゼウスの力に依るところが大きい。

悪しき暴力をはたらき無慈悲な行いをする者には、

クロノスの御子、遙かを見渡すゼウスが罰を下す。

しばしば町全体が苦しむ、

一人の悪人が罪を犯し無礼な行いを企んだために。

クロノスの御子はこのような者どもに天上から大いなる災いを下すのだ、

飢餓と疫病をともに。人々は死ぬ。

女たちは子を産まず、家は少なくなるが、

これもオリンポスのゼウスの御心によるものだ。あるときはまた、

クロノスの御子は、その国の大軍勢もしくは城壁を破り、

あるいは海の上の彼らの船に天罰を下す。(238-247)

この箇所以外にも、『仕事と日々』の正義論は、人間の正義を監視しその行為に応じて幸・不幸を与えるゼウスについて語っている。ここでは、正義を司る女神ディケーよりも、大神ゼウスの正義に対する権威の大きさが明確に示されている。

アラートス『パイノメナ』のディケー譚では、星座となった乙女の系譜についての3つの可能性が示されている。

太古の星の父であるというアストライオスの娘にせよ、
他のどなたかの娘にせよ、
彼女が穏やかに行かれますように。しかし人間たちには他の言い伝えがある、
かつて彼女は確かに地上にいたと。(98-101)

アストライオスはヘシオドス『神統記』(376,378-382)において、風たち・明けの明星・星辰の父とされている。「他のどなたか(τευ ἄλλου)」とはゼウスを指すとされる⁴⁹が、ここではその名前が伏せられている。アラートスはこれらの他に別の言い伝え(λόγος ἄλλος)があるとして、正義の女神ディケーの神話を語り始める。ここに、ヘシオドスの伝統を踏まえつつ、1つの星座に対して新たな意味づけをなそうとするアラートスの意図がうかがえる。『仕事と日々』の五時代説話にモチーフを得たディケー譚は、まず黄金時代の人間と女神ディケーとの交流を物語る。かつて地上で人々とともに暮らしていたディケーは、彼らに裁きを説き、生活に必要なすべてを与えていた。

彼女は人間たちの間を行き来して暮らし、男であれ
女であれ古い時代の種族を拒絶などせず、
入り交じって座していた。不死であるにもかかわらず。
人々は彼女をディケーと呼んだ。彼女は老人たちを
広場や広い道に集め、
人々のための裁きを説いていた。(102-107)

牛と犁とディケー自身が、人々を統べ、
正しいものを授けるディケーが、あらゆるものを与えていた。
その間彼女は地上にいた。大地がまだ黄金族を養っていたとき。(112-114)

⁴⁹ Kidd 1997, pp.217

ディケーは次に生まれた銀の種族とは積極的な交流を持たず、今よりさらに悲惨な未来が訪れることを予言して山へ去る。

しかし銀の時代には、彼女は人との関わりが少なくなり、もはや進んで交わろうとせず、

古い時代の人々を恋しがっていた。

それでもまだ銀の種族とは付き合っていた。

夕暮れ時にざわめく山から一人でやって来た。

誰とも親しく交わらず、

広い丘を人々で満たしたとき、

脅して悪行を責め、

彼らが呼んでももはや姿を見せることはないだろうと言った。

「黄金族の父親たちは、劣等な種族を残したものだ。

しかしおまえたちはさらに邪悪な子を生むだろう。

さらに争いが、そして無慈悲な流血が

人間たちに起こり、悪しき苦痛が課せられるだろう」

そう言って山を目指した。

なおも彼女を見つめるすべての人々を残して。(115-128)

青銅の種族の時代になると、ディケーは天空へ飛び去り、乙女座となって夜空に姿を見せる。

ディケーは人間のこの種族を嫌い

天空へ飛び去った。そしてその場所に住まわれた。

そこはまさに夜には今もなお人間たちに乙女が姿を見せ、

人目を引く牛飼いに近いところである。(133-136)

『パイノメナ』のディケーには、『仕事と日々』のディケーやゼウスのように、正義を守らない者たちに対して罰を与えるという働きは与えられていない。その代わりに、

ディケーは人々に正しいものを授けるという役割を担っている。ディケーは当初、黄金族が「痛ましい争いも喧嘩早い対立も戦いの騒音も知らず (108-109)」、「苦難の海は遠く、船が遠くから暮らしをもたらすことはまだない (110-111)」状態で生活するために不可欠な存在であった。しかし銀の時代になると、それまで密接であったはずのディケーと人間とのつながりが薄れ、女神は人間との交流を絶つ。「追いはぎが持ち悪行をなす刃物を初めて鑄造し、犁を引く牛を初めて食べた (131-132)」青銅の種族は、もはや直接ディケーの姿を見ることも声を聞くこともできない状態に置かれ、かろうじて星座となって夜空に現れるディケーを目にすることができるのみである。人間だけが所有することを許された概念として正義を示した『仕事と日々』において、人間の正義を見張り、ときに不正を犯す者たちに災いをもたらすために働いていたディケーは、『パイノメナ』で徐々に人間から離れていく。アラトスがディケー譚で描いた人間は、すべてを与えられていた黄金の種族から、銀の種族を経て食料や武器を自ら作り出す青銅の種族へ移り変わるにつれて、その力を増していく。それと同時に、ディケーが直接的に人間に及ぼす力は小さくなっていく。正義が必要とされるであろう「無慈悲な流血 (125)」と「悪しき苦痛 (126)」の課せられる時代に、人々を正しい行動へと導くはずのディケーは人間にとって近い存在ではなく、『仕事と日々』におけるゼウスのように不正を罰するものもない。乙女座としてのディケーに正義を見るかどうか、さらには不正を犯さず正義に従って生きることができるかどうかは、人間自身の選択にかかっているという状況が作り出されている。ここに、正義の主張という倫理的要素を含むアラトスの思想がうかがえる。

前節で述べた通り、古代の詩人たちは正義に作用する神々の力を描き、その後の哲学的な探求によって、実際の社会や共同体における具体的な正義の働きについての考察が進んだ。アラトスがディケー譚として作品に取り入れた正義の思想には、詩における箴言に始まり、哲学や倫理学の対象へ発展した正義の歴史が内在している。ディケー譚は、ヘシオドスをモデルとし、正義を再び訓戒として叙事詩の中に示したものであると言える。そこでアラトスが表したのは、星座となって人々に姿を見せるものの、徐々に空間的・時間的に人間と切り離されていく女神ディケーであった。それは、神々の支配を受けない自分たちだけの正義を獲得したはずの人間に対し、自らの行いの正しさを問いかける1つの教訓であったと考える。

第3節 自然科学に内在する倫理

前節までは、アラトスが作品に取り入れた倫理的性質について、ディケー譚に示された正義の概念に注目して論じた。本節では、『パイノメナ』全体に視野を広げ、この詩が主として専門的な知識を解説する自然科学的作品であることそれ自体から生まれる倫理的性質について考察する。

自然哲学は、古来より倫理思想と不可分に結びついてきた。ヘシオドスは『仕事と日々』において、正義すなわち人間世界の秩序原理が宇宙自然の秩序から独立して存在するものではないという考えを貫いている。ヘシオドスが神々の系譜という形で世界の起源や構造を考察したのに対し、初期のギリシア哲学者たちはこれらをミュートス（神話）ではなくロゴス（論理）によって合理的に説明することを目指した⁵⁰。ミレトス派の創始者タレスをはじめ、続くアナクシマン드로スとアナクシメネスもそれぞれ一元論的な説明を試みている。アナクシマン드로スの著作に、以下の一文がある⁵¹。

存在する諸事物にとってそれから生成がなされる源、その当のものへと、消滅もまた必然に従ってなされる。なぜなら、それらの諸事物は、交互に時の定めに従って、不正に対する罰を受け、償いをするからである。

（『アリストテレス「自然学」注解』24, 13）

彼は、「時」に定められた諸事物の生成消滅に正・不正を基準とした罰と償いが求められていることを主張しており、自然科学的な探求の中に人間の生き方と関わりを持つ倫理的性質が含まれていることがうかがえる。

彼らの形成したイオニア自然哲学に基づき、ホメロス以来の伝統的な神観を道徳的

⁵⁰ 生松・木田・伊東・岩田 1977、13頁

⁵¹ 内山勝利編『ソクラテス以前哲学者断片集 第□冊分』（1996年、岩波書店）181頁から引用。

に批判したのが、クセノファネスであった⁵²。第 1 章でも述べた通り、クセノファネス、パルメニデス、エンペドクレスら 3 人の哲学者たちのヘクサメトロス詩は、ギリシア文学史における教訓叙事詩の流れの中にも位置している。クセノファネスによる叙事詩『自然について』は、いくつかの断片が現存し、ホメロスやヘシオドスが彼らの詩の中で神々に人間の悪徳を行わせたことを非難している⁵³。この詩には、神を何者にも似ない全知全能で唯一至高のものとする彼の神学と、大地や水、海についての自然観が記されている。

エレア派の創始者とされるパルメニデスの哲学は、彼の叙事詩『自然について』に表明されており、そのうち約 150 行（最長で 61 行）の断片が現存する。この詩は序歌と本論によって構成され、ヘシオドス以来の教訓的な伝統に位置している⁵⁴。序歌ではまず、パルメニデスが多識の駿馬の馬車に乗り、日の乙女子たちの道案内で夜の国から昼の国へと急ぐ道行きが歌われる。ついで夜の道と昼の道を分ける大いなる門の番人として正義の女神ディケーが現れ、大道を進んだパルメニデスを真理の女神が迎える。本論では、真理の女神によって「真理の道」と「探ねえざる道」という 2 つの探求の道が説かれ、「あるもの」が「ないもの」にあることもその逆もないという前提から存在の生成消滅が否定される。このパルメニデスの論を認めつつ生成変化の現象を多元論的に説明しようとしたのが、エンペドクレスやアナクサゴラス、デモクリトスらであった⁵⁵。

エンペドクレスは『自然について』と『浄め』の計 5000 行にわたる 2 つの詩を作り、そのうち前者は約 350 行、後者は約 100 行が現存する。『自然について』では、不生不滅の四根（「火」「空気」「水」「土」）から万物が成立し、「愛」と「憎しみ」に起因する四根の結合と分離によって諸現象が発生することが説かれる。『浄め』では、憎しみの罪のために神のもとを追われた詩人が、愛の支配する故郷を想起しつつ輪廻転生し、再び神のもとに立ち返る過程が描かれる。彼の自然哲学の特徴は、自然現象の

⁵² 加藤 1996、35 頁

⁵³ 高津 1977、89 頁

⁵⁴ Trypanis 1981, pp.78

⁵⁵ 松本・岡・中務 1991、213 頁

原因を愛や憎しみといった人間の感情を想起させる概念と結びつけて捉えている点にあると考える。詩によって自らの自然哲学を主張したのはエンペドクレスが最後であり、以降は散文による記述が発達する。

プラトンの自然哲学が表された対話篇『ティマイオス』は、ソクラテスがティマイオス、ヘルモクラテス、クリティアスの3人に向かって、その前日に語ったという国家についての話の要約を再び語って聞かせるところから始まる。その話は『国家』においてソクラテスが語った内容と一致しており、プラトンは『ティマイオス』の読者に『国家』を想起させることを意図している。『ティマイオス』における宇宙は「すべての生きものを自分自身のうちに包括すべき生きもの⁵⁶ (33C)」であり、その性質や形状は「魂」や「身体」といった言葉を用いて人間と類比的に語られる。人間の構造と宇宙全体の構造とを関連づけた『ティマイオス』に対して、魂の正しさと哲人王による理想国家を語る対話篇『国家』では、個々の人間の構造と国家全体の構造が相互に関係している。『ティマイオス』の宇宙論は、現実の理想的な国家を描くために必要な前段階として機能する⁵⁷。プラトンの考える理想国家は、それを見ようと望む者やそれを見ながら自分の中に国家を作り出そうと望む者たちのために、天上に存在すると記されている（『国家』第9巻592B）。プラトンは天上の理想国家を想起することで人間の正しいあり方が導き出せると述べており、彼の理想国家論を宇宙論から切り離して捉えることはできない。

アイデアを対象とする哲学およびこれに準ずる数学のみを学問的知識とみなしたプラトンと異なり、アリストテレスは彼の学問的知識体系の中で、自然学的諸研究に対して重要な位置づけを与えている⁵⁸。アリストテレスは、見ること・行うこと・作ることという知能の区分に応じて、学問を理論学・実践学・制作技術の3つに大別し、制作技術よりも実践学を、実践学よりも理論学を優位に置いた⁵⁹。このうち、自然学は理

⁵⁶ 本稿における『ティマイオス』の引用は、種山恭子・田之頭安彦訳『プラトン全集 12 テイマイオス・クリティアス』（1975年、岩波書店）を参照。

⁵⁷ 種山・田之頭 1975、268頁

⁵⁸ 出・岩崎 1968、477頁

⁵⁹ 出 1972、30-31頁

論学に、倫理学は実践学に分類されている。プラトンのイデア論に見るように、アリストテレス以前は自然万有を支配する原理と人間の行為の規範となる原理は本質的に同じものと考えられ、その意味において自然学と倫理学の本質は同一であったと言える⁶⁰。アリストテレスによって、初めて学問分野としての自然学と倫理学との分離がなされた。彼が考えていた自然学の体系は、『気象論』の序論に示されている。

ところで、自然の第一義的な諸原因とあらゆる自然的な運動について、また天界の移動にしたがって配置されている諸星と物的諸元素——その数と性質、および相互変化——について、さらにまた生成と消滅一般についても、すでに論じられたのである。けれども、先人たちがみな気象論と呼んでいた研究部門はまだ残されていて、これから考察されなければならない。……しかし以上について論じ終えたなら、われわれは動物と植物とについて、一般的にも個別的にも、なんらかのしかたで説明できるかぎり、きめられた順序にしたがって考察するだろう。そしてその考察を終えたとき、われわれの最初の計画がすべて果たされたことになるだろう⁶¹。

（『気象論』 338a20-339a）

アリストテレスは自然学に関する多数の著作を残している。まず『自然学』において、自然に関する基本問題と、特に「運動」について論じる。『天体論』では、運動そのものだけでなく運動をする自然物体について、1・2巻では天体、3・4巻では月下の物体（四元素）を考察対象とし、『生成消滅論』では四元素の構成と相互変化、諸元素の結合により構成された自然物体の生成変化を論じる。『気象論』では、これら四元素の運動変化に関する一般法則が特殊な気象的諸現象に適用される。そして、『靈魂論』と『動物誌』その他動物学関係の著作において生物学的研究が完成されることにより、「最初の計画」すなわち自然学全体の研究が果たされると言う。自然物体とその運動を主題とする彼の自然学研究は、すべての自然物体を包括する永遠不滅の全宇宙（コスモス）の確立を目指していたとされる⁶²。

⁶⁰ 山内 1983、43 頁

⁶¹ 泉治典・村治能就訳『アリストテレス全集 5 気象論・宇宙論』（1969年、岩波書店）から引用。

⁶² 泉・村治 1969、212 頁

アリストテレスによって自然学と倫理学は別々の学問分野として認識されることとなったが、それぞれが互いに及ぼす影響が完全に遮断されたわけではなかった。ストア派の哲学は、論理学・自然学・倫理学の3つの分野によって構成される。それらの中でストア派哲学者たちが最も高い関心を抱いていたのは、倫理学であった⁶³。ストア派における倫理学は、自然学とのつながりの上に成り立つものとされている。

自然学にも同じ栄誉があたえられたのもゆえのないことではない。自然に合致して生きようとする人は、宇宙全体や宇宙の運営から出発しなければならないからである。さらにまた、誰かが善と悪について正しく判断することは、自然のロゴス全体や神々の生を知り、人間の自然本性が宇宙と合致しているか否かを知ることなしには不可能である。たとえば「時に従え」とか「神に従え」、「汝自身を知れ」とか「度を過ぎすなかれ」と命じる、いにしへの賢者の教えがどれほどの力をもっているか（きわめて大きな力をもつこと）を、自然学なしに見てとることは、誰にもできない。さらに、正義を護持したり、友愛やその他の愛を維持したりすることに対して自然がどれだけ有効であるかも、この認識だけが伝えることができる。さらには、神々に対する敬神の念も、神々にどれだけ感謝しなければならないかも、自然の解明なしには理解することができないのである⁶⁴。

(キケロ『善と悪の究極について』第3巻73)

「正義」や「友愛」は、アリストテレスの『ニコマコス倫理学』でも考察の対象となっている概念である。ストア派における倫理学の理解は、自然学の理解があって完成する。彼らの倫理学は、人間と自然全体との関係を対象にしていると言える⁶⁵。

古代ギリシアの倫理思想は、自然科学と分かちがたく結びついてきた。教訓叙事詩の歴史の中にも位置する3人の哲学者たちの作品に見る彼らの自然観は、純粹に自然

⁶³ リーゼンフーバー 1991、92 頁

⁶⁴ 中川純男・山口義久訳『初期ストア派断片集4』（2005年、京都大学学術出版会）断片282から引用。

⁶⁵ 小熊・川島・深谷 1985、36 頁

科学的であるとは言えないし、アリストテレスによって倫理学と自然学が個別の学問領域として切り離された後でさえ、自然科学に倫理的要素の関与がなくなったわけではない。特に、ストア派が重視する倫理学は、自然学の理解を必要としている。教訓叙事詩の作者たちや初期ストア派哲学の影響の中で、自然科学の専門的な知識に基づく『パイノメナ』もまた倫理的性質を内包し、教え諭すという役割を持って詩の中に自然学を展開していると考えられる。

本章では、アラトスが過去の教訓叙事詩をモデルとし、『パイノメナ』を教訓叙事詩にするための工夫として倫理的要素を取り入れたと考え、この作品に見られる倫理思想について考察してきた。ヘシオドスの時代から詩人や哲学者が考察を続けてきた正義の概念は、古代ギリシアの倫理思想史の中でも主要な位置を占め、その探求が進むにつれて、正義の属する場所が神々の下から人間自身の下へと変わった。正義の性質の変化はディケー譚にも影響していると推測され、アラトスは人間と切り離されて最後に星座となる女神ディケーの神話を作ることによって、人々に自らの行いの正しさを問う教訓を示したと考える。また、『パイノメナ』における倫理思想は作品全体の自然科学的な性質に内在しており、それは自然科学自体が倫理的な性格を帯びていることに由来する。詩人哲学者たちが作った教訓叙事詩がそうであったように、『パイノメナ』は教訓としての倫理的性質を持つ自然学書であると言える。しかしディケー譚や『パイノメナ』が有するこのような倫理的性質は、この作品が必要とした要素の1つであるものの、アラトスが最も重視した要素であるとは言えない。次章では、『パイノメナ』がヘレニズム時代に生まれた教訓叙事詩として、それまでの作品よりも重視したであろう要素について考察する。

第3章 『パイノメナ』に見る自然科学

第1節 ヘレニズムの科学とその有用性

ヘレニズム時代における教訓叙事詩の特徴の1つが、教示する内容の専門性であった。『パイノメナ』は天文学や気象学の分野に題材を見つけ、それらを読者に解説

するという形の作品である。本節では、特に天文学の発展に着目しつつ、ヘレニズム時代の科学の有する実践的側面と『パイノメナ』との関連について指摘する。

古代のギリシア人が天体现象の研究に従事した理由の1つが、暦の調整であった。紀元前432年までに、アテナイのメトンによって19年周期の閏月の正しい数が計算され、同時期までに、春分・秋分、夏至・冬至によって測られた四季の長さが異なるという重要な天文学的データが認識されていたと言われている⁶⁶。この頃にはすでに計算に基づく数学的な天文学が発達しつつあったと言えるが、その一方で紀元前4世紀の天文学は神学の域を脱していない。プラトンは『ティマイオス』において、昼と夜、月や星の循環、春分・秋分、夏至・冬至などを見ることで数が案出され、時間の観念や万有の本性についての探求が可能となり、それによって哲学が可能になったと言う(47A)。そして、神から与えられたとする「視覚」の働きについて、次のように語っている。

そしてその目的は、われわれが、天にある理性の循環運動を観察して、この乱れなき天の循環運動を、それとは同族であるが乱れた状態にある、われわれの思考の回転運動のために役立つようにということであり、そして、天の循環運動を十分に学んで、自然本来に即した正しい推理計算の仕方をわれわれが身につけ、こうして、どのようにしても彷徨することのない神の循環運動を模倣することによって、われわれのうちの彷徨した状態にある回転運動を、正常なものに立て直すようにということなのである。

(『ティマイオス』47B-C)

プラトンにおける天体(恒星)の円運動は、人間がそれを模倣し、正しく生きるための指針であった。彼は、惑星の見かけ上の不規則な運動が、イデア界においては秩序正しい完全な円運動であると主張している。彼の弟子であったエウドクソスはこれを受けて、円運動が天体の運動を最も合理的に説明しようと考へ、地球を中心として太陽・月・5惑星のそれぞれをのせる天球と、そのさらに外側に恒星を散りばめた天球

⁶⁶ ロイド 1994 (120 頁) を参照。メトン周期については、『パイノメナ』(753) にも記述がある。

の存在を想定した⁶⁷。序章でも述べた通り、アラートスの『パイノメナ』はエウドクソスによる同名の著作を基にして作られている。彼が唱えた同心球説は、アリストテレスによって、説明のための幾何学的なモデルではなく実在するものとして捉えられることとなる⁶⁸。天体の完全な円運動が神的理性によるものであると考えたアリストテレスは、天体の科学性よりも神性を重視した天文学をさらに発展させた⁶⁹。

ヘレニズム以前のギリシアにおける自然科学は、自然や社会の細かい部分に関して深い知識を有することができず、それらの本質を全体として大まかに捉えようとしていた⁷⁰。これに対して、ヘレニズム時代は個別科学が哲学から分化して独立に発達し始めた時代と言われており、古代ギリシアの科学は紀元前3世紀頃にその最盛期を迎えたとされる⁷¹。第1章において、ムセイオンおよび付設の図書館における文献学的な活動について述べたが、アレクサンドリアは文学だけでなく科学研究の中心地でもあった。帝国内外の学者たちが王の招集に応じ、王の保護の下で当時最先端の研究に従事することが可能であった。この時代に、数学・物理学の分野ではエウクレイデスやアルキメデス、天文学では地動説を提唱したアリスタルコスなど、科学の各分野において多数の高名な学者たちが輩出されており、このことはアレクサンドリアを中心とした科学研究の興隆に由来している。

アリストテレスは自然学すなわち広義の科学を、神学や数学とともに理論学の枠組みの中に置いた。彼を含めそれ以前のギリシアにおける科学は、観察される諸事象よりも自身の理念や信念に重きを置く傾向が強いように思われる。しかし、ヘレニズムの科学はこの状況を脱して、実証を重視する段階へと発展を進めている。言い換えると、学問や研究の目的が知識の追求のみならず、その利活用という点に求められるように変化しつつある。このような時代にあり、科学者たちの専門的な知識を基にしている教訓叙事詩もまた、それらの知識の実践、さらに言うと、日常的な生活での利用

⁶⁷ 矢野 2004、33 頁

⁶⁸ 矢野 2004、33 頁

⁶⁹ ファリントン 1955、147 頁

⁷⁰ 渋谷 1982、144 頁

⁷¹ 以下、ヘレニズムの科学については、武谷 1960 (38-39 頁)、ロイド 2000 (4 頁) を参照。

という視点を有していたと考える。

第2節 『パイノメナ』の知識と実践

『パイノメナ』は星座だけでなく、月や太陽、生物や植物の様子など、夜と昼のそれぞれで観察できる諸事物について読者に教えている。この詩が読者に要求しているのは、観察される諸事物を基に、知りたい事柄に対して確実な判断を下すことである。このことは、結論として詩の末尾に示されている。

これらを軽視してはならない。1つの目印に加えて他の目印を見ることは
良いことであり、2つあればさらに有望であり、
3つあれば自信を持つことができる。
過ぎゆく年を通して常に目印を数え、
比較しなさい。星々の昇りと沈みに応じて
その日が目印の予告するように現れているかどうかを。(1142-1147)

これらすべてを同時に、1年を通して観察すれば、
天空についてはっきりしない判断をすることはないだろう。(1153-1154)

『パイノメナ』は、知識の習得とそれに基づく正しい判断を求めている。正確な判断が必要とされる理由については、冒頭の序歌にアラートスの主張が表されている。

ゼウスのことから始めよう。我々人間が彼について語らずに済ませたことはない。
ゼウスは満ちているのだ、すべての街路、
すべての人間の広場、そして海や港に。
いずこにあれ我々はすべてゼウスを必要とする。
我々は出自においてもゼウスに属するのだから。人間に慈悲深いこの神は
人間に有用な目印を示し、人々を仕事 (ἔργον) に目覚めさせ、
生計 (βίωτος) を思い出させる。土が牛や鋤に最も良い時はいつかを教え、

木を植えたりあらゆる種を蒔いたりするのに最も適した時期はいつかを教える。
彼こそが目印を天空に固定して
星座を区別し、1年を通して星々を用意したのだ。
季節の最も明確な目印を人間に与えるために。
そしてすべてがきちんと育つように。(1-13)

ここにおいて、ゼウスは人間に星座や前兆といった目印を示すものとして、あらゆる場所に存在する。アラトスはゼウスがそれらの目印を与える理由を、人間が時宜に叶った仕事を行うためであると言う。すなわち、アラトスは読者に対して知識を基にした正しい判断に加え、その判断に基づく実際の正しい行動を求めている。

では、人間が行うべき時宜に叶った仕事とは具体的にどのようなものを指すのか。目印の意義について述べた次の箇所から、「仕事」を連想させる2つの事柄を読み取ることができる。

夜の終わりを宣言するには黄道12星座が
確実である。しかし長い1年の中で
休耕地を耕す時期や、木を植える時期は、
いずこであれすでに、ゼウスによってすべて現されている。
航海中に波の打ちつける嵐に気づいた者もおり、
それは恐ろしいアルクトゥロスに注意を払ってか、
黄昏時あるいはまだ夜の早い時間に大洋から引き上げられる
他の星々に注意を払ってのことである。(740-747)

ここには、星や星座の観察が、夜間の時刻の計測だけでなく農作業の時期の確認や航海時の天候の予測等に有効な手段となり、農耕・航海という人間の生活に必要不可欠な行為と結びついていることが示される。夜空を観察することの有用性は、理論的な天文学を推進したプラトンでさえ指摘している。『国家』(527D)では、哲人王を育成するための教育の1つとして天文学を挙げており、登場人物であるグラウコンはその

理由を次のように述べている⁷²。

「月や星の移り変りにおけるさまざまな時期（季節）を正確に感知するというこ
とは、農耕や航海に必要であるだけでなく、軍隊統率のためにも、それに劣らず
大切なことですからね」

これに対して、ソクラテスは次のように返す。

「何だか大衆に気がねして、役にも立たない学問を押しつけようとしていると思
われはしないかと、びくびくしているように見えるではないか」

プラトンはグラウコンが述べたような理由で天文学を推奨することに反対している。
しかし、大衆における天文学の有用性を否定しているわけではなく、むしろその実用
的な側面を認めていると言える。

農耕と航海は『仕事と日々』においても主要なテーマとして扱われているが、そこ
で説かれる教訓は当時の人々の生活の知恵や迷信をまとめたものである。アラトス
は『パイノメナ』を作るにあたり、エウドクソスやテオプラストスといった当時の自
然科学者による専門書を参考にして、詩という形でそれらの知識を提示した。学問的
知識を用いた実践を目的とする『パイノメナ』中の農耕や航海に関する多数の記述は、
人々が日常生活において目印（星座や前兆）を活用するための具体例となっているだ
けでなく、天文学や気象学の分野に属する専門的な事柄を民衆に対してより親しみや
すいものになっていると考える。

第3節 『パイノメナ』およびディケー譚における農耕と航海

『パイノメナ』に記された星座のいくつかには、農作業の時期を知らせるものとし

⁷² 下記の引用は、田中美知太郎・藤沢令夫訳『プラトン全集 11 クレイトポン・国家』（1976年、岩波書店）を参照。

ての解説がなされている⁷³。詩の後半では、天候や風についての月(778-818)、太陽(819-908)、その他星や動植物(909-1043)による前兆の後に、耕作や収穫の時期を示す目印、作物や農作業に影響する自然現象についての前兆がまとまって記される⁷⁴。これらを説明した上で、アラトスは日々の暮らしに労働を必要とする人間に対して次のように語り、目印の習得を勧めている。

このように苦勞多く安らぎのないわれわれ人間は、それぞれのやり方で
生きている。しかし身近な目印を見分けて
それを将来のために定めておくことは誰にでもできる。(1101-1103)

このように述べた後、羊飼いや牛飼い、農夫などがそれぞれの仕事に即した身近な動物から荒天を予測する方法を教えている⁷⁵。『パイノメナ』には航海についても多数の記述があり、目印を学んで航海に役立てることを読者に勧める。

それゆえ、苦勞してそれらを学びなさい。もし船を信賴しているのであれば、
目印をすべて見つけることに集中することだ。
冬の風や海の嵐について用意されている目印を。
苦勞はわずかだが、後に注意深さの利益は莫大である。
常に用心する人には。
まず自分自身が安全であり、他の人に良く
忠告をして役に立つ。嵐が身近に起こったときに。(758-764)

『仕事と日々』(618-694)においても、航海についての教訓は述べられている。しか

⁷³ 獅子座と麦の収穫(149-151)、プレイアデスと夏冬の始まりおよび耕耘(254-267)、シリウスと果樹(329-335)

⁷⁴ 常緑の櫛および洋乳香樹と厳冬・耕作の時期・収穫量(1044-1059)、海葱と収穫(1060-1063)、スズメバチ・豚・羊・山羊と長い冬(1064-1071)、山羊・豚・羊と好天(1072-1074)、鶴と冬の到来(1075-1081)、牛・羊と厳冬(1082-1087)、雪と豊作(1088-1090)、彗星と日照り(1091-1093)、鳥の群れと干ばつ・山羊の搾乳(1094-1100)

⁷⁵ 羊(1104-1112)、牛(1113-1121)、山羊(1122)、豚(1123)、狼(1124-1128)

し、ヘシオドスは古代ギリシアの一般の人々以上に航海を嫌う傾向が強かったと言われている⁷⁶。『仕事と日々』における星についての言及は、そのほとんどが農耕に関するものであり、航海と直接的に関係しているものは一箇所のみである⁷⁷。ヘシオドスが生きたのは紀元前8世紀頃とされるが、ギリシアに三段櫂船が登場する紀元前5世紀頃には、地中海周辺に大小さまざまな商業都市が成り立ち、黒海からレヴァント・ナイル川・アドリア海・ジブラルタル海峡に至るまで、船で海岸沿いに穀物・オリーブ油・ワインなどが輸送されていた。紀元前4世紀頃のアテナイは年間約800隻分の穀物を輸入して30万人を養い、人口過剰であったギリシアの諸都市で穀物船は大きな経済的・政治的意義を担っていたと言う⁷⁸。『パイノメナ』における星座は、航海中の進路や天候の予測のために観察するものとされ、船乗りによる目印の正しい識別や時期にかなった航海が求められている。この詩に記された多くの星座に航海と関連づけた説明がなされていることから、航海における利用というアラトスの意図がうかがえる⁷⁹。

『パイノメナ』に見られる農耕や航海への関心は、ディケー譚からも読み取ることができる。ディケー譚には、農耕と航海を連想させるいくつかの語彙が使用されている。ディケー譚における黄金時代に、人々の生活は航海と無縁のものとされていた。黄金族にとって苦難の「海 (θάλασσα)」は遠く、「船 (νήες)」が遠くから「暮らし (βίος)」をもたらすこともなかった(110-111)が、銀・青銅の種族を経てディケーが星座となった後もそのような状態のままであるとは言えない。「βίος (暮らし)」については、序歌にほぼ同義の「βιότος (生計)」という語が使用されているが、そこでは

⁷⁶ 松平 1986、155頁

⁷⁷ プレイアデスの昇り沈みと収穫・耕耘(383-387,571-572)、シリウスと伐木(417-421)・夏の時季(582-588)、アルクトウロスの昇りと立春(564-567)、オリオンと麦の脱穀(597-599)、オリオン・シリウス・アルクトウロスとぶどうの収穫(609-611)、プレイアデス・ヒュアデス・オリオンの沈みと耕作および種まき(614-616) プレイアデス・オリオンと風および航海への警告(619-621)

⁷⁸ 古代ギリシアにおける航海の歴史については、シュライバー 1977(35-36頁)、フェイガン 2013(155頁)を参照。

⁷⁹ 大熊座・小熊座と海上の進路の目印(36-44)、獅子座と航海の警告(149-155)、水瓶座・山羊座・射手座と航海の警告(282-302)、祭壇座・ケンタウロス座と海上の暴風の目印(408-435)、エリダヌス座・オリオン座と夜および航海の長さを知る目印(728-731)

ゼウスが「人間に有用な目印を示し、人々を仕事(ἔργον)に目覚めさせ、生計(βίος)を思い出させる(6-7)」と記されている。乙女座である女神ディケーもまた、人間にとっての「有用な目印」である。

アラトスは、ディケーと農耕との関連を意識している。乙女座となったディケーは、その手に輝く麦の穂を持つと記されている(97)。これは乙女座の一等星スピカ(ラテン語で「麦の穂」)のことを指している。この星の朝の昇りが収穫の合図であり、暦の上で最も重要な日であったことに、麦との関係の起源があると言われている⁸⁰。『仕事と日々』の農事暦においても、以下の場面で「麦の穂(στάχυς)」という語が使われている。

地の神ゼウスと聖なるデメテルに祈れ、
デメテルの神聖な穀物が、重き実りをもたらすことを、
耕作の始めに際して。犁の取手の端を
片手に握り、革紐の留め釘を引っ張る牛(βοῶν)の背に
突き棒を打ち下ろすときには。その少し後に
奴隷がつるはしを持ち、鳥たちに苦役を置くのがよいだろう、
種を隠すことによって。死すべき人間たちにとって、
良い順番で物事を行うことが最も良く、手順が悪いことが最も悪い。
かくして、もしオリュンポスの神々が良き結果を与えてくだされば、
麦の穂(στάχυες)は地面に頭を垂れ、
甕の中の蜘蛛の巣を掃うだろう。(465-475)

麦の穂に象徴される豊作は、人々がゼウスと穀物や大地の生産物の女神デメテルに祈願し、適切な農事を行うことによってもたらされる。乙女座となったディケーに見られる「麦の穂」もまた、彼女と農耕との関係を象徴するものである。

乙女座は古代社会のいろいろな地方において、小麦をもつ娘または収穫の娘を表し

⁸⁰ Kidd 1997, pp.215

ていると考えられていた⁸¹。例えば、バビロニアにおいて乙女座にあたる星座には、「エシュ・シン」または「シルー（穂）」の他、「ア・エディン（種を創造する女神）」の名があったと言われる⁸²。プトレマイオス朝時代に作られ、古代エジプト固有の星座とメソポタミア起源の黄道 12 宮などの星座が描かれたデンデラ・ハトホル神殿の天体図では、獅子座の尾をつかむ女性で表された「畝」とナツメヤシの葉をもつ女性で表された「葉」という 2 つの星座が統合された形で乙女座が表されており、この星座は秋の農耕と結びついているとされる⁸³。このように農事と関連をもつ乙女座は、しばしばデメテルやその娘ペルセポネと同一視され、彼女ら大地女神への信仰が乙女（Παρθένος）という名前の由来であると考えられている⁸⁴。

『仕事と日々』の五時代説話における黄金時代は、「肥沃な耕地はひとりでに多くの豊富な稔りをもたらしていた（117-118）」とあり、人々にとって農耕は必ずしも必要ではなかった。一方ディケー譚における黄金の時代は、「牛と犁（βόες και ἄροτρα）とディケー自身が、人々を統べ、正しいものを授けるディケーが、あらゆるものを与えていた（112-113）」とある。ここでも、ディケーは牛（βόες）と犁（ἄροτρα）という農耕に不可分な事物とともに記されている。ディケーは後に生まれた青銅族を嫌って天空へ飛び去るが、青銅族は犁を引く牛（βοῶν ἀροτήρων）を初めて食べた種族であった（132）。牛と犁については、『仕事と日々』に次のような記述がある。

犁を家で作って、2つ用意しておきなさい、
元々1つにつながっているものと、接合したもので、こうしておくともとても良い。
もし1つが壊れても、もう1つを牛に付けることができるからだ。
軛棒は月桂樹か榆のものが最も虫が付きにくく、
犁の台木は櫟、轆は常盤櫟のものがよい。9歳の牡牛2頭を
手に入れておきなさい、その力は疲れを知らず、
働き盛りの年頃で、働かせるには最も良い。

⁸¹ バーナム 1988、435 頁

⁸² 野尻 1982、52 頁

⁸³ 近藤 2010、113-115 頁

⁸⁴ Kidd 1997, pp.215

それらは畦で争って犁を

壊し、たちまち仕事を無益にすることもない。(432-440)

ヘシオドスはこのように述べ、耕作のために牛と犁を整備しておくことを勧めている。

「牛と犁 (βόες καὶ ἄροτρα)」という語は、序歌 (8) にある「牛や鋤 (βουσί τε καὶ μακέλησι)」を想起させるフレーズでもある⁸⁵。序歌に記されたゼウスは、「土が牛や鋤に最も良い時はいつかを教え、木を植えたりあらゆる種を蒔いたりするのに最も適した時期はいつかを教える (7-9)」。前節で述べた通り、序歌には知識に基づく正確な判断が必要とされる理由が表されており、それは人間がきちんと働き生活するためであった。

以上のように、アラトスは農耕・航海という行為に特別な関心を払い、その姿勢はディケー譚にも表れている。『パイノメナ』を読む一般の民衆は、この詩に解説された星座や前兆などの自然科学的知識を、農耕や航海をはじめとする日々の暮らしにおいて活用することとなる。

本章では、道徳的・倫理的な主張に重きを置かず、主として専門的な知識を記すヘレニズムの新たな教訓叙事詩が重視していることについて考察してきた。それは、自然科学的知識の有する実用性であると考えられる。ヘレニズム時代の自然科学は、実証的な側面において進歩し、学問や研究の目的を利活用に求める傾向が強くなった。そのような時代にあり、科学者たちの専門的な知識を基に生まれた『パイノメナ』は、解説する知識の実践を目的とし、人々がそれらの知識を日常生活に役立てることを意図している。日々の暮らしにおける自然科学的知識の利用というアラトスの視点は、『パイノメナ』中の農耕や航海などの人々の仕事に関する多数の記述から読み取ることができる。『パイノメナ』やディケー譚に表れた農耕や航海は、この詩が専門的な自然科学の知識の実用性を重視する新しい教訓叙事詩であることを示していると考えられる。

⁸⁵ Kidd 1997, pp.222

結論

ヘレニズム時代において、詩はかつてのように市民全体に向けられたものではなく、学者的な教養を持つ限られた人を真の対象とする風潮を強めていた。この時代に「教訓叙事詩」として作られた『パイノメナ』は、知識階級と一般民衆という2種類の読者を意識している。ヘレニズムの詩として知識人たちによる詩的な理解を望みつつ、教訓叙事詩として庶民に教え諭すという役割を担ったこの作品は、分離されたはずの知識階級と一般民衆との橋渡し役を果たそうとしていたのではないだろうか。

ヘシオドスや古代の詩人哲学者たちは自らの主張を語るために叙事詩という形を用いたのに対し、アラートスは教訓叙事詩を作り出すことそれ自体を目的としていた。このような価値の倒錯が背景となり、アラートスは『パイノメナ』を教訓叙事詩の伝統に合うものとするために、作品の内部に倫理思想を必要としていたと考える。アラートスが挿入したディケー譚にはギリシアにおける正義の思想史が反映され、『パイノメナ』が自然科学を解説する教訓叙事詩として成立した所以には人の道徳や倫理と自然科学との古来の関係がある。教訓叙事詩における伝統的な要素が倫理的な性格であるとすると、ヘレニズム的な新しい要素は科学的性格、さらに言うとその実用的性格である。実証的な自然科学が発達し、科学研究の目的を実際的な応用に求めはじめた時代であり、自然科学の専門的知識に基づく『パイノメナ』は、読者がこの詩で得た知識を実生活で用いること、具体的には農耕や航海などの場面で活用することを意図していた。

『パイノメナ』が備えている古代ギリシアの倫理思想や道徳的な教訓は、当時の身分に関係なく、万人の共感を得ることができたはずである。そして、学者による専門的な書物をわかりやすい詩の形にしたこの作品は、自然科学の学問的知識を庶民に供給することにより、知識階級と一般民衆との間に存在する溝を埋めるという働きを持っている。この詩の持つ自然科学と倫理思想という2つの要素が、ヘレニズムの知識人と民衆の垣根を越えた「教訓叙事詩」を成立させていると考える。アラートスはヘレニズムの詩人として、それまでの詩作品に学び、それらが備えていたものを自身の作品のうちに含ませた。そして、詩が芸術として学問と一線を画すものであるという

認識の下で、教えるという目的を持って学問に素材を得、詩という1つの作品の中に学問を展開してその実用性を裏付けている。ヘレニズムに至るまでの教訓叙事詩というジャンルを一方では継承し他方では刷新したアラートスによって、過去の伝統を備えつつ新しいスタイルを持つ教訓叙事詩として、『パイノメナ』が誕生したと考える。

【参考文献一覧】

<原典・注釈>

Evelyn-White, H. G. 1914 *Hesiod; The Homeric hymns; and, Homeric*, Loeb classical library 57, Harvard University Press.

Kidd, Douglas 1997 *Aratus: Phaenomena*, Cambridge University Press.

Mair, A.W. and G.R. Mair 1955 *Callimachus: hymns and epigrams; Lycophron; Aratus*, Loeb classical library 129, Harvard University Press.

West, M. L. 1978 *Hesiod: Works & Days*, Oxford University Press.

伊藤照夫訳 2007 『ギリシア教訓叙事詩集』 京都大学学術出版会。

松平千秋訳 1986 『ヘーシオドス 仕事と日』 岩波書店。

<その他書籍・論文>

Faulkner, Andrew 2015 "The Female Voice of Justice in Aratus' Phenomena", *Greece & Rome*, 62(1), April, pp.75-86.

Gee, Emma 2013 *Aratus and the Astronomical Tradition*, Oxford University Press.

Hornblower, Simon, Antony Spawforth and Esther Eidinow (eds.) 2012 *The Oxford Classical Dictionary* Fourth Edition, Oxford University Press.

Poehigian, Aaron 2010 *Aratus: Phaenomena*, Johns Hopkins University Press.

Solmsen, Friedrich 1996 "Aratus on the Maiden and the Golden Age", *Hermes*, 94(1), pp.124-128.

Trypanis, C. A. 1981 *Greek poetry: from Homer to Seferis*, London, Faber and Faber.

Volk, Katharina 2012 "Letters in the Sky: Reading the Signs in Aratus' Phaenomena", *American Journal of Philology*, 133(2), pp.209-240.

- 生松敬三・木田元・伊東俊太郎・岩田靖夫編 1977『西洋哲学史の基礎知識』有斐閣ブックス。
- 泉治典・村治能就訳 1969『アリストテレス全集 5 気象論・宇宙論』岩波書店。
- 逸身喜一郎・川崎義和・高橋克美訳 1991『ギリシア悲劇全集 10』岩波書店。
- 逸身喜一郎 2000『ギリシャ・ローマ文学—韻文の系譜—』放送大学教育振興会。
- 出隆 1972『アリストテレス哲学入門』岩波書店。
- 伊藤照夫 1985「アラートのディケー—Phainomena のエピソードについて—」『京都産業大学論集』人文科学系列 12 号, 3 月, 75-90 頁。
- 岩田靖夫 1985『アリストテレスの倫理思想』岩波書店。
- 内多毅 1978『ヨーロッパ世界の文学』東海大学出版会。
- 内山勝利編 1996『ソクラテス以前哲学者断片集 第 I 冊分』岩波書店。
- 編 1997『ソクラテス以前哲学者断片集 第 II 冊分』岩波書店。
- 宇都宮芳明・熊野純彦編 1994『倫理学を学ぶ人のために』世界思想社。
- 大島康正 1973『新倫理学』自由書房。
- 大島康正編 1978『倫理学の展開』北樹出版。
- 小熊勢記・川島秀一・深谷昭三編 1985『西洋倫理思想の形成 I』晃洋書房。
- 加藤信朗訳 1973『アリストテレス全集 13 ニコマコス倫理学』岩波書店。
- 川島秀一編 1999『倫理思想の世界—古代より宗教改革まで—』晃洋書房。
- 種山恭子・田之頭安彦訳 1975『プラトン全集 12 ティマイオス・クリティアス』岩波書店。
- 久保正彰 1973『ギリシア思想の素地—ヘシオドスと叙事詩—』岩波書店。
- 1992『ギリシア・ラテン文学研究』岩波書店。
- 久保正彰・橋本隆夫訳 1990『ギリシア悲劇全集 1』岩波書店。
- 訓覇曄雄・有福幸岳編 1989『倫理学とはなにか その歴史と可能性』勁草書房。
- 高津春繁 1977『古代ギリシア文学史』岩波書店。
- 近藤二郎 2010『わかってきた 星座神話の起源—エジプト・ナイルの星座』誠文堂新光社。
- 酒井泰治 1989『増補改訂 西洋科学・技術史序説—古代から近世前後の展開を中心に—』学書房。
- 坂本秀人 2013『科学思想史の探求』学文社。

- 島田四郎 1985『西洋倫理思想史』玉川大学出版部。
- 渋谷寿夫 1982『科学と歴史—科学と科学史のための汎論—』法律文化社。
- シューテリヒ、H.J. 1975『西洋科学史 I—揺籃期の科学』菅井準一訳、社会思想社。
- シュライバー、ヘルマン 1977『航海の世界史』杉浦健之訳、白水社。
- スネル、B. 1974『精神の発見』新井靖一訳、創文社。
- 新開長英 1966『ギリシアの哲学と倫理』明玄書房。
- 武谷三男 1960『自然科学概論 第2巻—現代科学と科学論—』勁草書房。
- 田中美知太郎・藤沢令夫訳 1976『プラトン全集 11 クレイトポン・国家』岩波書店。
- デアボラフ、J. 1984『ヨーロッパ倫理学の足跡』川原栄峰編、早稲田大学出版部。
- 中川純男訳 2000『初期ストア派断片集 1』京都大学学術出版会。
- 中川純男・山口義久訳 2005『初期ストア派断片集 4』京都大学学術出版会。
- 中野重伸 1975『倫理学概説』高文堂出版社。
- 野尻抱影編 1982『星座』恒星社厚生閣。
- バートン、タムシン 2004『古代占星術—その歴史と社会的機能—』豊田彰訳、法政大学出版局。
- バーナム、R. Jr. 1988『星百科大辞典 改訂版』斉田博訳、地人書館。
- 廣川洋一訳 1984『ヘシオドス 神統記』岩波書店。
- 1987『ソクラテス以前の哲学者』講談社。
- ファリントン、B. 1955『ギリシャ人の科学—その現代への意義— (上)』出隆訳、岩波書店。
- フェイガン、ブライアン 2013『海を渡った人類の遙かな歴史 名もなき古代の海洋民はいかに航海したのか』東郷えりか訳、河出書房新社。
- ブルクハルト、J. 1992『ギリシア文化史 第3巻』新井靖一訳、筑摩書房。
- 松原國師 2010『西洋古典学事典』京都大学学術出版会。
- 松本仁助・岡道男・中務哲郎編 1991『ギリシア文学を学ぶ人のために』世界思想社。
- 矢野道雄 2004『星占いの文化交流史』勁草書房。
- 山内友三郎編 1983『西洋倫理学史』学術図書出版社。
- 山川偉也 1996「ギリシア的正義」『桃山学院大学人間科学』10巻, 1月, 1-28頁。
- 山口義久訳 2002『初期ストア派断片集 3』京都大学学術出版会。
- リーゼンフーバー、クラウス 1991『西洋古代中世哲学史』放送大学教育振興会。

- レイノルズ、L.D.・ウィルスン、N.G. 1996『古典の継承者たち—ギリシア・ラテン語
テキストの伝承にみる文化史』西村賀子・吉武純夫訳、国文社。
- ロイド、G.E.R. 1994『初期ギリシア科学—タレスからアリストテレスまで』山野耕治・
山口義久訳、法政大学出版局。
- 2000『後期ギリシア科学—アリストテレス以後』山野耕治・山口義久訳、法政
大学出版局。
- ロミィ、J.D. 1998『ギリシア文学概説』細井敦子・秋山学訳、法政大学出版局。